

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

宮城県、牡鹿半島の東南東 130 キロメートル付近の太平洋プレートを震源とする巨大地震が発生、マグニチュード 9.0 の東北地方三陸沖地震で、岩手、宮城、福島の大東三県と茨城まで被災、それにともなう大津波で未曾有の大災害に巻かれた、3月11日から6ヶ月が経過、この東日本大震災は、原子力発電所の原子炉の炉心のウラン燃料が灼熱状態になって溶け落ちるといふ「メルトダウン（炉心溶融）」を生じたと報じられているが今だに正確に知らされていない。

しかし、自然界に存在しないとされるプルトニウム 239 が確認された事実や水素爆発、放射能汚染牛等の出現等は、地震による深刻な二次被害を意味する。

自然界から与えられたこの試練に対して、国策で進められた原子力エネルギー政策を今一度、真剣に考え直してみる必要があると思われる。

中国の古詩、あるいは寒山拾得の教え「生年不満足、常懐千歳憂（せいねんひるひにみちたず、常に千歳の憂いを懐く）」の考え方を、行政、自治体、国民、企業の全員が、それぞれの立場でかみしめて謙虚な姿勢で考察、対応されることを期待する。

それは「百歳まで生きられない短命の身でありながら、千年先の多くの憂いを抱いている」、各々の立場で 50 年先、100 年先、1000 年先の国や企業や国民のあるべき理想の為に最善の方法をさぐるべきである。

仏教の物の見方、考え方として「因果応報と想定外を考える」、「脚下照顧を学ぶ」、「以和為貴、無忤為宗」等についても併せて、学び考えて見ることにしたい。それは自己中心的な物の見方、考え方に片よらないための教えを学び実践するためである。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪（野風生）
雅号 樹泉

2. 因果応報と想定外を考える

仏教の教えに、因縁生起という考え方がある。それは一切の事物は固定的な実体をもたず、さまざまな原因（因）や条件（縁）が寄り集まって成立しているという仏教の根本思想である。

したがって、想定外は、ある一定の状況や条件を仮に想い描くという想定という物の見方、考え方にもとづく思考法であり、その想定の外であり、思いつかない、考えられないということらしいが……。

しかし、仏教における物の見方、考え方は「因果応報」という考え方に代表されるように、想定外という言葉は基本的に考えられない。

そこで、「因果応報」について考えてみると、その基本となる考え方は、

一般に因果とは、原因と結果のことであり、いかなるものでも生起させるものを因といい、生起されたものを果という。

事象を成立せしめるものと、成立せしめられた事象、原因があればかならず結果があり、結果があれば必ず原因があるというのが因果の理である。

いわゆる、あらゆるものは因果の法則によって生滅変化するということである。

原因の中に因（親）と縁（疎）とがあり、俱舎論では四縁、六因、五果を立て、唯識論では四縁、十因、五果を説いて一切の万象の成立、壊滅、迷悟の世界の相状等、一として、因果関係に由らざるものなしとしている（応報）、酬い現われて誤りなしとされている

